源氏物語

時は平安時代。巷では、藤原氏を中心とした貴族政治が華やかに行われていたころ、「光源氏」という、「光り輝くほど」美しく、魅力的な一人の男性を主人公として生まれた物語が、『源氏物語』です。作者は紫式部。一条天皇の后、中宮彰子に仕えた女房でした。場面ごとに、数数の和歌をおりまぜた『源氏物語』は、全部で五十四帖もありますが、紫式部が書いていくそばから大評判になり、貴族の子女たちはみんな「源氏」を夢中になって読みました。（そのころは印刷技術がなく、本はすべて人の手で書き写されていたので、続きが読みたくてもなかなか手に入らなかったのです。）

それではいったい、千年前の貴族を夢中にした、ゲンジモノガタリって、どんなものなのでしょうか？

スーパーマン光源氏の「光と影」

帝を父に、桐壺更衣という女性を母に生まれた源氏は、幼いときに母を亡くし、また父帝の考えもあって貴族の列からは外れてしまいますが、それを除けば、父である天皇や人々皆に愛され、本来の優れた資質もあいまって、世の中に二人といない、美しく魅力的な若者に成長します。

ちなみにどんなふうに「魅力的」だったかというと……

まず、「身分が高く」「美形」で、「スポーツ（蹴鞠・弓）万能」、「和歌が上手」、「漢詩・漢文も得意」、「音楽（琴・笛）名人級」、「字も絵もうまい」、そしてなんといっても「情熱的で優しい」その性格……といったところでしょうか。

だから、当然恋人もいっぱい、御厨子は女の子からのラブレターでいっぱい、の源氏なのでした。でも、残念ながら源氏には、ただ一つの「悪い癖」が……！

それは、（皆さんにも覚えがありませんか？）「どうしたって無理なこと」に夢中になってしまうこと……。

例えば、障害のある恋ほど「燃えて」しまい、政敵である右大臣の娘（朧月夜）と秘密の恋をしたり、義理の母である、父帝の新しい后（藤壺）を愛してしまったり……。その結果、さまざまな事件をひきおこし、順風満帆とはいいがたい運命をさまようことになります。無実の罪を着せられて、須磨・明石の浦に三年間隠れ住んでいたこともありました。

でも、そうやって世の中を知り、人間的にも成長していった源氏は、運命の力に導かれ、最後には准太上天皇という高い位にまでのぼりつめるのでした。

それでは、「悪い癖」はそれとして、光源氏は並ぶものもない夢のような一生を送った……のでしょうか？

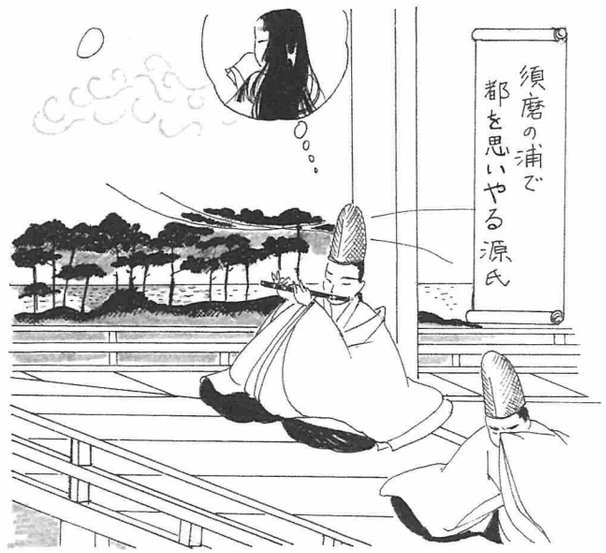
物語には、王朝絵巻そのままの、理想的できらびやかな生活が描かれると同時に、源氏にまつわるさまざまな人間模様が映し出されています。権勢を求める公卿、子や孫の出世を願う老人、親子のつらい別れ、恋路を阻まれ迷う若人たちなど……。彼らは皆、それぞれの身分・立場に応じた悩みをもつわけですが、それはけっして源氏といえども無縁ではありません。心ならずも、愛する人を傷つけ、不幸にし、自分自身もひとり罪の意識に苦悩する源氏は、並びない栄華を謳歌する天下人であると同時に、自らの宿世と因果におののく孤独な人間でもあるのでした。

このように見てくると、紫式部は、その巧妙な筆によって、人が生きていく上で避けて通れない「影の部分」といったものを読者に問いかけているようです。

光源氏が産声をあげる「桐壺」の巻から、源氏の子、薫を主人公とした最後の宇治十帖まで含めて、『源氏物語』には大勢の人が登場しますが、これらの巻々を通して、彼らの喜怒哀楽は、けっして単なる昔物語ではないことに気づくことでしょう。優美な歌や、音楽、四季の美しさを愛するとともに、ひたむきに恋に生き、恋に死んだ王朝の人々の「雅びな世界」をのぞいてみませんか？

きっと千年の時を超えて、皆さんがこれから出会うであろう、さまざまな愛と生の姿が見えてくるはずです。

＊　＊



年　組　氏名（　　）

気軽に読める「源氏物語」

○文庫本で現代語訳してあるもの

谷崎潤一郎訳『源氏物語』　中公文庫

円地文子訳『源氏物語』　新潮文庫

○漫画でもあるゾ

大和和紀『あさきゆめみし』　講談社

でも、古語の美しい言葉遣いと響きを味わえ、あわせて古典の勉強にもなるのは、やはり原文で読むこと。ぜひ古文のそのままの文章にもトライしてほしい。図書室に行けば、小学館の「日本古典文学全集」など、古文を主として、その現代語訳がついている本がそろっているはずです。